

正当性の文脈が携帯メールによる 自己主張方略に及ぼす影響

大 坂 綾

正当性の文脈が携帯メールによる自己主張方略に及ぼす影響

The Influence of the Context of Legitimacy on Self-assertion Strategy in Cellular Phone E-mail

大 坂 綾

I. 問題

われわれは、誰もが平等に自分の考えや気持ちを表現することが認められている。しかし、その時の状況や、これまでの文脈、場面によっては、うまく自己主張ができないことを経験することがある。

1. 依頼・断りの場面

自己主張を行う場面の一つとして、依頼や断りの場面が挙げられる。依頼、断り、どちらの場面も、日常的に誰もが経験する場面である一方で、このような場面で自己主張することに困難を感じる人も多い。三田村・松見(2009)は、大学生が「依頼・断り」の場면을、自己主張が困難な場面として多く挙げていることを指摘している。なお、本研究では自己主張の意味を、特に依頼・断りの意味で用いることとする。

2. 自己主張における文脈の影響

依頼・断りのような自己主張が困難な場面において、アサーション理論やポライトネス理論が注目されている。アサーションとは、「自分も相手も大切にしたい自己表現」であり、「自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直に、その場の状況にあった適切な方法で述べること」と定義される(平木,2002)。また、ポライトネスとは、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動」(宇佐美,2002)であり、話し手が相手との社会的・文化的要因

を見積もって、それに応じた最適な自己表現方略を選択することが強調される(Brown& Levinson,1978)。

2つの理論に共通していることは、どのような言語表現を使うことが正しいかどうかに関及しているのではなく、自分と相手との文脈の中で、どのような自己主張方略が適しているかどうかに関心があることである。少なくとも話し手は、自分が今いる時点のさまざまな文脈を考慮し、それらを総合的に判断し、自分にとって最適と思われる方法を選択することが求められる。

実際、自己主張場面は、無数の文脈情報によって構成されていると考えられるが、中でも自己主張方略の選択に影響を与える要因とは何であろうか。

Brown& Levinson(1978)は、「社会的距離」、「力関係」、「相手にかかる負荷度」をその要因として挙げている。「社会的距離」や「力関係」の要因について、石川・無藤(1990)は、話し手と聴き手の「役割関係」という点に注目し、研究を行った。その結果、役割関係の変化によって、自己主張の方略が変化することが示された。

また、中山(1988)は、日本人が伝達する情報の冗長度が高い間接的な表現を好んで用いることを指摘している。その背景には過剰配慮があるとし、自分と相手との心理的な距離をウチ(非常に親密な人)、ヨソ(自分とは全く無関係な人)、ソト(職場や学校の人)と呼称した場合、過剰配慮はソトの関係にお

いて最大になると述べている。さらに、上下関係などの力関係の存在も過剰配慮現象の有無に関与しており、一般的に下位者から上位者に対するコミュニケーションに生じやすく、その逆は少ないとしている。

一方、岡本（1986）は、聞き手に発生する実質的なコストが増すと、話し手は間接表現を用いて自己主張することを明らかにした。他者配慮的な日本人において、「相手にかかる負荷度」といった自己主張の内容に関する要素の影響が大きいと考えられる。

3. 正当性の文脈と自己主張

さらに、話し手は主張する権利があるか、聞き手はそれに従う義務があるかという相対的關係に重点を置いた、「権利と義務」という要素が間接表現の使用に影響を及ぼすことが指摘されている（Thomas,1995）。しかし、指摘にとどまるのみであり、間接表現の使用に関して、「権利と義務」という観点から検討された研究は少ない。

三田村・松見（2010）は、自己主張の「正当性」という文脈に着目し、「権利と義務」という要素が自己主張に与える影響について検討を行った。なお、「正当性」とは文脈に応じて変化する、社会的規範からみた話し手の自己主張に対する妥当性や受け入れやすさと定義されている。その結果、正当性が高い文脈よりも正当性が低い文脈で、より冗長で謝罪表現を多く含んだ、間接的な表現が多く使用されていることが示された。この研究は、大学生の被験者が、依頼・断りの場面においてどういった自己主張を行うかについて、対面を想定した実験的方法によって検討されている。

しかし、依頼や断りに関する自己主張を行う場合、対面場面にとどまらないのではないだろうか。特に、現代の大学生においては、「携帯メール」の存在が大きいと考えられる。近年の携帯電話の普及に伴って、携帯電話の

メール機能によるやり取りも広く普及してきた。若者の間では、さまざまな場面・用途で携帯メールが使用され、携帯メールによるコミュニケーションは、ひとつのコミュニケーションの形態として定着していると考えられている（岡田・松田,2012）。よって、大学生による自己主張の傾向を明らかにするためには、携帯メールの使用場面についても検討する必要があると考えられる。

II. 目的

本研究では、自己主張の正当性の変化によって生じる、携帯メールによる話し手の自己主張方略の変化について検討する。また、依頼・断りの場面における大学生の自己主張方略の傾向を明らかにすることを目的とする。

III. 方法

1. 被験者と調査時期

4年制大学の学生99名、男性22名、女性77名を対象に、質問紙調査を実施した。調査の実施期間は2012年9月末から10月上旬であった。

2. 手続き

大学の授業において協力者を募り、質問紙を配布し、回答が終了したところで回収した。

なお、携帯メールは文字でのやり取りであるため、自由記述形式の質問紙によって調査を行った。

3. 自己主張場面

本研究では、三田村・松見（2009）で収集した自己主張が困難な場面で多かった「依頼・断り」の記述を参考に、三田村・松見（2010）が設定した「飲み会の誘いを断りたい場面」、「貸したお金を返して欲しい場面」、「アルバ

イトのシフトを交代して欲しい場面」の3場面を場面刺激として使用した。各場面には自己主張の正当性が高い文脈（正当性高条件）と低い文脈（正当性低条件）の2つの文脈（2条件）が設けられていた。

ただし本研究では、会話ではなく携帯メールでの自己主張場面を想定するため、三田村・松見（2010）の教示文および質問文の修正を行った。

4. 質問紙の構成

4-1. フェイスシート

学科、学年、年齢、性別、また、携帯電話の有無（1：持っている、2：持っていない）について回答を求めた。

4-2. 各場面における携帯メールでの自己主張

「アルバイトのシフトを交代して欲しい場面」、「貸したお金を返して欲しい場面」、「飲み会の誘いを断りたい場面」の3場面ごとに、正当性高条件・正当性低条件それぞれの文脈について、携帯電話の使用によってどのようなメールを作成・送信するのか、自由記述で回答を求めた。

場面1：アルバイトのシフト交代の依頼

「アルバイト仲間にシフト交代を依頼する際、どのようなメールを作成し、相手に送信するかについてお聞きします。この質問には（A）と（B）の異なる2つの状況が設定されています。」

- (1) 正当性高条件：「（A）あなたはこれまでそのアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが何度もあります。」
- (2) 正当性低条件：「（B）あなたはこれまでそのアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが一度もありません。」

場面2：貸したお金の返済請求

「友人に貸したお金の返済請求をする際、どのようなメールを作成し、相手に送信するかについてお聞きします。この質問には（A）と（B）の異なる2つの状況が設定されています。」

- (1) 正当性高条件：「（A）今日は返す約束の期日を1週間以上過ぎています。」
- (2) 正当性低条件：「（B）あなたは『返すのはいつでもいいよ』と相手に伝えていました。」

場面3：飲み会の誘いに対する断り

「飲み会の誘いを断る際、どのようなメールを作成し、相手に送信するかについてお聞きします。この質問には（A）と（B）の異なる2つの状況が設定されています。」

- (1) 正当性高条件：「（A）前回誘われた際に、『今回だけでいいから』という友人との約束であなたは出席しました。」
- (2) 正当性低条件：「（B）前回誘われた際、『次回は出席するから』と友人に約束してあなたは欠席しました。」

4-3. 操作チェック

それぞれの場面・条件ごとに自己主張することがどれほど正当であると感じるかを「完全に正当（6点）」、「かなり正当（5点）」、「やや正当（4点）」、「やや不当（3点）」、「かなり不当（2点）」、「完全に不当（1点）」の6件法で回答を求めた。

5. 分析方法

被験者の自由記述について、その文字数や使用している単語について、分析を行った。

本研究における統計処理については、全てSPSS（Version20）を使用した。

表1 各場面における文脈条件ごとの正当性の平均得点とSD.

場面	正当性高条件	正当性低条件	<i>t</i> 検定
場面1	4.36 (0.87)	3.29 (1.06)	***
場面2	5.25 (0.83)	4.11 (1.15)	***
場面3	4.73 (0.95)	3.34 (1.22)	***

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, *n.s.*: not significant
注) () 内はSD

IV. 結果

1. 操作チェック

場面1 (アルバイトのシフト交代の依頼の場面) において、文脈の各条件 (正当性高条件・正当性低条件) の正当性の平均得点について被験者内要因の *t* 検定を行った。その結果、文脈の各条件において正当性の平均得点の差が0.1%水準で有意で、正当性高条件 (平均4.36) が正当性低条件 (平均3.29) よりも有意に高得点であった ($t(98) = 9.45$, $p < .001$)。

場面2 (貸したお金の返済請求の場面) において、文脈の各条件 (正当性高条件・正当性低条件) の正当性の平均得点について、被験者内要因の *t* 検定を行った。その結果、文脈の各条件において正当性の平均得点の差が0.1%水準で有意で、正当性高条件 (平均5.25) が正当性低条件 (平均4.11) よりも有意に高得点であった ($t(98) = 11.36$, $p < .001$)。

場面3 (飲み会の誘いに対する断りの場面) において、文脈の各条件 (正当性高条件・正当性低条件) の正当性の平均得点について被験者内要因の *t* 検定を行った。その結果、各条件において正当性の平均得点の差が0.1%水準で有意で、正当性高条件 (平均4.73) が正当性低条件 (平均3.34) よりも有意に高得点であった ($t(98) = 11.80$, $p < .001$)。

2. 各場面での自己主張における冗長性の差

調査より得られた自由記述について、各場面の文脈条件ごと (正当性高条件・正当性低条件) に文字数のカウントを行った。

2-1. 場面間の差

本研究では、3場面それぞれを質的に異なった状況であると仮定している。そこで、実際に各場面が等質でないことを確認するために、独立変数を場面 (場面1・場面2・場面3)、従属変数を発話内容の平均文字数とした、被験者内要因の1要因3水準の分散分析を行った。球面性の仮定が成立しなかったため、Greenhouse-Geisserの自由度の修正を行った。その結果、場面の主効果は0.1%水準で有意であった ($F(2,196) = 110.86$, $p < .001$)。さらに、どの場面間に有意な差が見られるかについて Bonferroniの多重比較を行ったところ、場面1 (平均95.11) と場面2 (平均66.97)、場面2と場面3 (平均54.26)、場面1と場面3のそれぞれにおいて、いずれも0.1%水準で有意な差が見られた。

2-2. 文脈間の差と性差

場面1において、文脈 (正当性高条件・正当性低条件) の違い、また性差 (男性・女性) によって、自己主張の冗長性に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の2×2の分散分析を行った (図1参照)。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果は0.1%水準で有意であった ($F(1,97) = 28.60$, $p < .001$)。平均文字数について、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に大きかった。被験者間要因では、性の主効果は有意ではなかった ($F(1,97) = 1.40$, *n.s.*)。また、交互作用は有意ではなかった ($F(1,97) = 2.12$, *n.s.*)。

場面2において、文脈（正当性高条件・正当性低条件）の違い、また性差（男性・女性）によって、自己主張の冗長性に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の2×2の分散分析を行った（図2参照）。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果の有意傾向が認められた（ $F(1,97) = 3.67, p < .10$ ）。平均文字数について、正当性高条件よりも正当

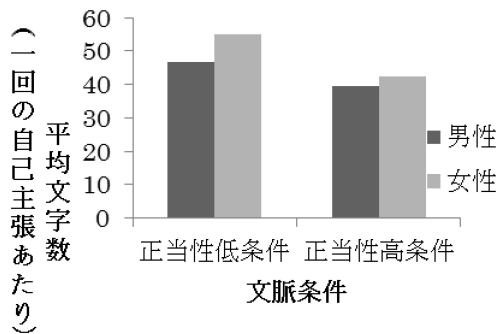


図1 場面1における性別および各条件の平均文字数。

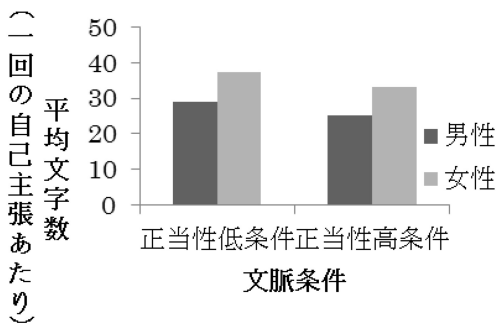


図2 場面2における性別および各条件の平均文字数。

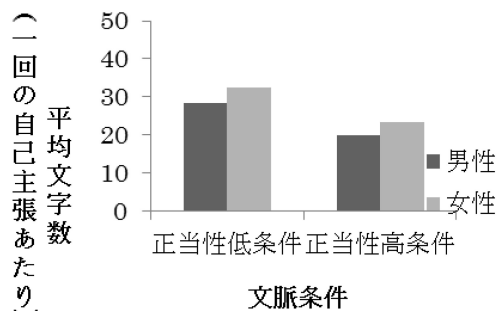


図3 場面3における性別および各条件の平均文字数。

性低条件の方が大きかった。被験者間要因においても、性の主効果の有意傾向が認められた（ $F(1,97) = 3.93, p < .10$ ）。男性よりも女性の方が平均文字数が大きかった。交互作用は有意ではなかった（ $F(1,97) = .00, n.s.$ ）。

場面3において、文脈（正当性高条件・正当性低条件）の違い、また性差（男性・女性）によって、自己主張の冗長性に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の2×2の分散分析を行った（図3参照）。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果は0.1%水準で有意であった（ $F(1,97) = 33.63, p < .001$ ）。平均文字数について、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に大きかった。被験者間要因では、性の主効果は有意ではなかった（ $F(1,97) = 1.52, n.s.$ ）。また、交互作用は有意ではなかった（ $F(1,97) = .06, n.s.$ ）。

3. 各場面での謝罪表現の出現頻度の検討

調査より得られた自由記述の中から、場面ごとに文脈の各条件（正当性高条件・正当性低条件）において、謝罪表現を抽出した。謝罪表現は、「すみません」、「すまません」、「悪い（けど）」、「ごめん」、「申し訳ない」の5つとした。

3-1. 場面間の比較

場面間の平均謝罪表現数について、独立変数を場面（場面1・場面2・場面3）、従属変数を平均謝罪表現数とした、被験者内要因の1要因3水準の分散分析を行った。球面性の仮定が成立しなかったため、Greenhouse-Geisserの自由度の修正を行った。その結果、場面の主効果は0.1%水準で有意であった（ $F(2,196) = 61.64, p < .001$ ）。さらに、どの場面間に有意な差が見られるかについてBonferroniの多重比較を行ったところ、場面1（平均1.18）と場面2（平均.52）、場面2

と場面3（平均1.96）、場面1と場面3のそれぞれにおいていずれも0.1%水準で有意な差が見られた。

3-2. 文脈間の差と性差

場面1において、文脈（正当性高条件・正当性低条件）の違い、また性差（男性・女性）によって、平均謝罪表現数に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の2×2の分散分析を行った（図4参照）。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果は0.1%水準で有意であった（ $F(1,97) = 21.86, p < .001$ ）。平均謝罪表現数について、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に大きかった。被験者間要因では、性の主効果は有意ではなかった（ $F(1,97) = .18, n.s.$ ）。また、交互作用は有意ではなかった（ $F(1,97) = .01, n.s.$ ）。

場面2において、文脈（正当性高条件・正当性低条件）の違い、また性差（男性・女性）によって、平均謝罪表現数に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の2×2の分散分析を行った（図5参照）。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果は有意ではなかった（ $F(1,97) = 2.40, n.s.$ ）。被験者間要因では、性の主効果は5%水準で有意であった（ $F(1,97) = 6.71, p < .05$ ）。また、交互作用は5%水準で有意であった（ $F(1,97) = 4.87, p < .05$ ）。さらに、どの条件間に有意な差が見られるかについて文脈、性について単純主効果の検定を行った。初めに、男性において文脈を独立変数とし、平均謝罪表現数を従属変数とした被験者内要因の1要因2水準の分散分析を行った。その結果、文脈の主効果は有意ではなかった（ $F(1,97) = .14, n.s.$ ）。次に、女性において文脈を独立変数とし、平均謝罪表現数を従属変数とした被験者内要因の1要因2水準の分散分析を行った。その結果、文脈の主効果は有意であった（ $F(1,97)$

$= 15.88, p < .001$ ）。女性の場合、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に平均謝罪回数が大きかった。次に、正当性高条件において性を独立変数とし、平均謝罪表現数を従属変数とした被験者間要因の1要因2水準の分散分析を行った。その結果、性の主効果は有意ではなかった（ $F(1,97) = .90, n.s.$ ）。次に、正当性低条件において性を独立変数とし、平均謝罪表現数を従属変数とした被験者間要因

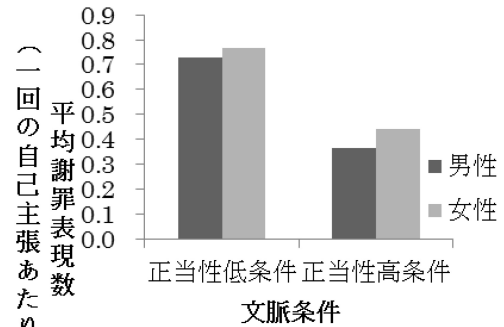


図4 場面1における性別および各条件の平均謝罪数。

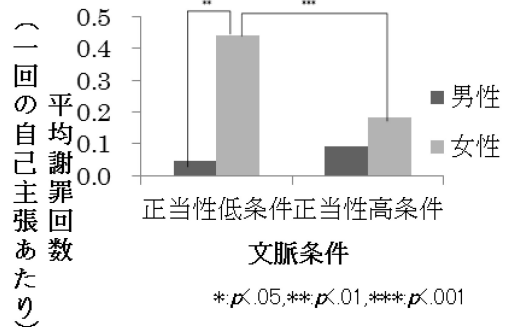


図5 場面2における性別および各条件の平均謝罪数。

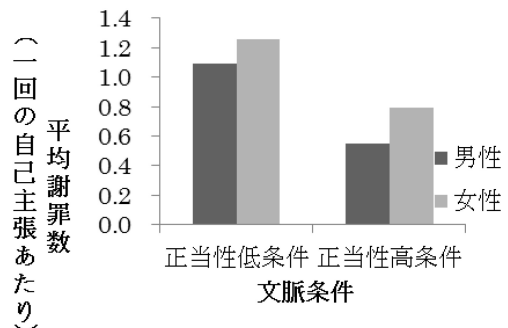


図6 場面3における性別および各条件の平均謝罪数。

の1要因2水準の分散分析を行った。その結果、性の主効果は1%水準で有意であった($F(1,97) = 8.70, p < .01$)。正当性低条件の場合、男性よりも女性の方が有意に平均謝罪表現数が大きかった。

場面3において、文脈(正当性高条件・正当性低条件)の違い、また性差(男性・女性)によって、平均謝罪表現数に違いがあるかを検証するために、文脈を被験者内要因、性を被験者間要因とする2要因の 2×2 の分散分析を行った(図6参照)。その結果、被験者内要因において、文脈の主効果は0.1%水準で有意であった($F(1,97) = 35.03, p < .001$)。平均謝罪表現数について、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に大きかった。被験者間要因では、性の主効果は有意ではなかった($F(1,97) = 2.45, n.s.$)。また、交互作用は有意ではなかった($F(1,97) = 2.1, n.s.$)。

4. 各場面での自由記述におけるカテゴリー分析

各場面において得られた発話内容の平均文字数と平均謝罪表現数の違いから、場面1、場面2、場面3はそれぞれ異なった状況であったと考えられる。したがって、発話内容の分析については、それぞれの場面に合わせ別々の枠組から検討を行った。

なお、本研究では、被験者における男性・女性の人数比率に大きな差があり、そのことが、カテゴリー分析に影響を与える可能性があるため、3場面全てで性差の分析を行わなかった。

4-1. 場面1：アルバイトのシフト交代の依頼

文脈(正当性高条件・正当性低条件)の違いによって、依頼表現の言い回しに差があるかを検証するために、発話内容の分類を行った。

なお、自由記述の中には、複数の文章や多

くのセンテンスから構成されるものもあった。岡本(1986)は、依頼文において、前置き、話し手の事情の説明、相手の事情の確認、依頼の限定などが伴うことがあることを指摘している。よって本研究では、相手に求める行動を具体的に述べている部分を抜き出し、それに基づいて分類した。

分類にあたって、岡本(1986)の依頼分類カテゴリーを参考に、三田村・松見(2010)が「アルバイトのシフトの交代」という場面に合わせ、独自に作成した依頼表現の分類カテゴリーを使用した。分類は、「代わって」、「返して」など語尾が直接形でかつ命令、直接的依頼である「直接表現」、「代わってもらえる?」「返してもらってもいい?」など語尾が疑問形である「疑問形表現」、「代わってほしいんだけど」、「お願いしたいんです」、「返してほしいな」など語尾が直接形で願望を述べた文である「願望表現」の3分類であった(表2参照)。

願望を述べていたとしても、そのあとに聞き手の意向を問うように語尾が疑問形となっている場合(「代わってほしいんだけど、お願いできますか?」)は、「疑問形表現」に分類した。また、「?」の使用がなくても、語尾が相手に意向を問うような表現であった場合(「バイト代われませんか。」)には、「疑問形表現」に分類した。

正当性高条件・正当性低条件における「直接表現」の使用について、McNemar検定を行った(表3参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「疑問形表現」の使用について、McNemar検定を行った(表3参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「願望表現」の使用について、McNemar検定を

表2 各場面における各カテゴリーの代表例

【場面1】	
カテゴリー	代表例
直接表現	シフト交代してください。 バイトかわって!!
疑問形表現	シフトの交代をしてもらえないでしょうか? バイトかわってもらえない?
願望表現	シフト交代してもらいたいです。 バイト代わってほしいんだけど…
【場面2】	
直接表現	お金を返してください。 お金返してー。
疑問形表現	貸したお金返してもらえないですか? お金返してもらえるかな?
願望表現	お金早く返していただけると嬉しいです。 お金返してほしいんだけど…
示唆	金欠になりました。 貸したお金返してくれたっけ?
【場面3】	
謝罪	ごめんね 申し訳ないんだけど
理由	都合が悪いので 用事があるって
直接断り	行けない。 欠席します。
また誘って	また誘ってね。 また誘ってくれると嬉しいです。

行った(表3参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった ($N=99, n.s.$)。

4-2. 場面2：貸したお金の返済請求

文脈(正当性高条件・正当性低条件)の違いによって、依頼表現の言い回しに差があるかを検証するために、発話内容の分類を行った。

場面1と同様に、自由記述が複数の文章で構成される場合、相手に求める行動を具体的に述べている部分を抜き出し、それに基づいて分類した。

場面2では、場面1での依頼表現の3分類(「直接表現」・「疑問形表現」・「願望表現」)に加えて、「あー、金ないなあ」など返してほしいことを暗に伝える「示唆」の4分類であった(表2参照)。

場面1と同様に、願望を述べていたとしても、そのあとに聞き手の意向を問うように語尾が疑問形となっている場合、また、「?」の使用がなくても、語尾が相手に意向を問うような表現であった場合には、「疑問形表現」に分類した。さらに、「示唆」(「あー、金ないなあ」)を含むが、そのあとに他の表現が続く場合は、「示唆」には分類せず、後の表現のカテゴリーに基づいて分類した。例えば、「示唆」の後に「直接表現が続く場合(「金ないなあ、早く返して」)は、「直接表現」への分類を行った。

正当性高条件・正当性低条件における「直接表現」の使用について、McNemar検定を行った(表4参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった ($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「疑問形表現」の使用について、McNemar検定を行った(表4参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間において「疑問形表現」の使用の比率には1%水準で有意な差があり($\chi^2(1, N=99) = 6.88, p < .01$)、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に「疑問形表現」の使用が多かった。

正当性高条件・正当性低条件における「願望表現」の使用について、McNemar検定を行った(表4参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「示唆」の使用について、McNemar検定を行った(表4参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった($N=99, n.s.$)。

4-3. 場面3：飲み会に対する断り

文脈(正当性高条件・正当性低条件)の違いによって、断り表現の言い回しに差があるかを検証するために、発話内容の分類を行った。場面3の断り表現について、カノックワン・ラオハブナキット(1995)の断り表現を参

考に、三田村・松見(2010)が分類した「謝罪」、「理由」、「直接断り」、「また誘って」の要素を用いて分類を行った(表2参照)。

「直接断り」に分類されるのは、「行けません」、「欠席します」などであった。よって、間接的に行けないことを示す「予定が入っている」などの表現は「直接断り」には分類しなかった。

正当性高条件・正当性低条件における「謝罪」の出現頻度について、McNemar検定を行った(表5参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間において「謝罪」の出現頻度の比率には0.1%水準で有意な差があり($\chi^2(1, N=99) = 17.93, p < .001$)、正当性高条件よりも正当性低条件の方が有意に「謝罪」の出現頻度が多かった。

正当性高条件・正当性低条件における「理由」の出現頻度について、McNemar検定を行った(表5参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「直接断り」の出現頻度について、McNemar検定を行った(表5参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見ら

表3 場面1における依頼表現のカテゴリー別出現比率 ($N=99$)

カテゴリー	正当性高条件	正当性低条件	McNemar検定
直接形表現	3.03%	2.02%	<i>n.s.</i>
疑問形表現	83.84%	89.90%	<i>n.s.</i>
願望表現	13.13%	8.08%	<i>n.s.</i>

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, *n.s.*: not significant

注) 値は自由記述における各カテゴリーのパーセンテージ

表4 場面2における依頼表現のカテゴリー別出現比率 ($N=99$)

カテゴリー	正当性高条件	正当性低条件	McNemar検定
直接形表現	24.24%	14.14%	<i>n.s.</i>
疑問形表現	44.44%	62.63%	**
願望表現	18.18%	9.09%	<i>n.s.</i>
示唆	13.13%	14.14%	<i>n.s.</i>

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$, *n.s.*: not significant

注) 値は自由記述における各カテゴリーのパーセンテージ

表5 場面3における各分類要素の有無の頻度 (N=99)

要素	正当性高条件	正当性低条件	McNemar検定
謝罪	65.66%	88.89%	***
理由	64.65%	62.63%	<i>n.s.</i>
直接断り	70.71%	73.74%	<i>n.s.</i>
また誘って	6.06%	12.12%	<i>n.s.</i>

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$, *n.s.*:not significant

注) 値は自由記述における各要素のパーセンテージ

れなかった ($N=99, n.s.$)。

正当性高条件・正当性低条件における「また誘って」の出現頻度について、McNemar検定を行った(表5参照)。その結果、正当性高条件・正当性低条件間での有意な差は見られなかった ($N=99, n.s.$)。

V. 考察

1. 自己主張の冗長性と謝罪表現の使用回数

初めに、話し手は正当性の高い文脈に比べ低い文脈で、より多くの謝罪表現を使用し、より冗長な自己表現を行うかどうかについて検証する。

場面1(アルバイトのシフト交代の依頼)と場面3(飲み会の誘いに対する断り)において、文脈の違いによって自己主張の冗長性に有意な差があることが示された。また、場面2においては有意傾向が認められた。いずれの場面においても、正当性の高い文脈よりも正当性の低い文脈で、発話が冗長になる傾向があることが明らかになった。性差についてはいずれの場面においても認められなかった。

また、場面1(アルバイトのシフト交代の依頼)と場面3(飲み会の誘いに対する断り)において、文脈の違いによって謝罪表現の出現回数に有意な差があることが示され、正当性の高い文脈よりも正当性の低い文脈で、謝罪表現が多く使用されることが明らかになった。場面1・場面3において性差は認められなかった。それらの結果から、場面1・場面

3において話し手は、正当性の高い文脈に比べ低い文脈で、より多くの間接表現や謝罪表現を使用し、より冗長な自己表現を行っていたと言える。しかし、場面2においては、謝罪表現の出現回数に関して、場面1と場面3とは異なる結果が得られた。よって、場面2について詳しく見ていくこととする。

岡本(1986)によれば、「依頼」は話し手が相手から一方的に利益を受ける「恩恵場面の依頼」と、相手もたらす話し手にとって望ましくない事態の改善・修復を求める「修復場面の依頼」に分類される。本研究における依頼場面を分類すると、場面1(アルバイトのシフト交代の依頼)は「恩恵場面の依頼」、場面2(貸したお金の返済請求)は「修復場面の依頼」に分けられる。

場面2は、相手がお金を返済していないことによって、話し手における望ましくない事態がもたらされているため、その改善を求めるための依頼が想定される。つまり、場面2における依頼は、相手の行為に原因があるため、全体的に話し手の謝罪表現の使用回数が少なかったと考えられる。

また、お金の返済請求の場面で、正当性高条件よりも正当性低条件において謝罪表現の使用回数が増えることは女性にのみ現れる特徴だと考えられる。この結果は、三田村・松見(2010)の先行研究で得られた結果とも異なるものであった。

場面2においてのみ、異なる結果が得られたため、お金の返済請求という場面に関して、直接対話と携帯メールでの自己主張について

差があると考えられる。直接対話場面では、正当性が低い文脈において、男女共により謝罪表現の多い冗長性の高い自己主張を行っていたのに対し、携帯メールにおける自己主張場面では、男性は正当性の文脈に関わらずに、謝罪表現をほとんど使用しないことが明らかになった。

ただし、本研究では被験者における男女の人数差が大きかったため、そのことが、性差の分析の結果に影響を与えている可能性も考えられる。性差の検定については、被験者の男女の割合を等質にし、再度試みる必要があるだろう。

2. 自己主張方略の傾向

次に、発話内容における表現方法の違いについて場面ごとに考察する。

場面1において、正当性の文脈間で自己主張の表現方法に差はなかった。正当性高条件においても、正当性低条件においても「疑問形表現」が最も多く使用されており、8割以上が「疑問形表現」による自己主張を行っていた。この結果は、三田村・松見(2010)の対話場面の結果とも一致する。常体・敬体の使用にはばらつきが認められたが、場面1においては、全体的に敬体の使用によって自己主張が行われていた。場面1は「恩恵場面の依頼」であり、話し手の一方的な利益のための依頼であるので、正当性の文脈に関係なく、丁寧な言葉遣いによる間接的な自己主張が行われることは当然のことであるかもしれない。

場面2において、両条件ともに貸したお金の返済請求の際には「疑問形表現」の使用が最も多く、正当性高条件よりも正当性低条件の方が「疑問形表現」の使用が多かった。場面2は「修復場面の依頼」であるので依頼を口にする事自体が、相手のもたらした負の事態の責任を指摘・非難することになり得る(岡本,1986)。よって、聞き手の意向を問う

「疑問形表現」を使用することで、聞き手に対してより配慮的な態度を示していると考えられる。また、正当性高条件において返却の期日を指定していたのに対して、正当性低条件では、話し手は聞き手に返却の期日を指定していなかったことから、「返してもらえる？」等の表現に、「いつごろ返せそう？」等の表現も加わり、正当性高条件よりも正当性低条件で「疑問形表現」の使用が多かったと考えられる。三田村・松見(2010)による対話場面の研究では、「直接表現」の使用についても有意な差がみられている。正当性低条件よりも正当性高条件で多く「直接表現」が使用されていたが、本研究では有意な差は見られなかった。先行研究と比較すると、正当性高条件における「願望表現」や「示唆」の割合が高いことから、携帯メールにおいては、自己主張の正当性が高い場合でも、直接的な表現を避ける傾向があると考えられる。

場面3において、正当性の文脈が謝罪表現の使用にのみ影響を及ぼしていることがわかった。正当性高条件よりも正当性低条件の方が謝罪表現を使用する人が多かった。断り表現における他の各要素に有意な差はなかったため、断りの場面で自己主張の正当性が低い場合には、申し訳なく感じていることを伝達することを重要視する傾向があると言えるだろう。

3. まとめと今後の課題

場面1から場面3において、それぞれ場面に特有な表現方法が抽出された。この結果は、携帯メールの使用による自己主張においても、話し手が文脈を考慮し、それに合わせて自己主張方略を選択していることを示唆しているだろう。また、対話場面を想定した三田村・松見(2010)の結果とは、多少ながらも違った結果が得られたため、コミュニケーションツールの違いによっても、自己主張方略に差がみられると考えられる。

本調査における今後の課題について述べる。本調査は、話し手がどのような自己主張を行うかについて検討を行った。しかし、話し手の自己主張には必ず聞き手が想定され、相互のコミュニケーションを前提として展開される。よって、聞き手の視点を取り入れた研究が必要となるであろう。例えば、話し手の自己主張が聞き手に与える印象や、聞き手がどれほど話し手の主張を受け入れ、それに応じる気になったか等が考えられる。

また、自己主張場面での重要な要素である非言語的な表現の調査にまで及ばなかったことを問題点としてあげる。本研究では、携帯メールでの自己主張場面を想定し行われたが、文字に限定したメール文章の分析には限界があることが示唆された。三宅 (2006) は、携帯メールにおける非言語的な表現として、絵文字・顔文字の分析が有用であると指摘している。しかし、絵文字・顔文字に関する確立された分析方法は示されておらず、今後そのような分類方略の検討が求められる。

さらに、分析方法の検討に加え、調査方法の改善も必要であると考えられる。本研究では、質問紙による調査を行ったが、絵文字・顔文字はほとんどデータとして得られなかった。よってデータとして得るためには、携帯メールを使用し、被験者に実際のメールを打ってもらうといった実験的な手法について検討する必要があるだろう。

さらに、正当性という文脈要因にのみならず、自己主張に影響を与え得る他の文脈の要因に関しても検討を試みたい。石川・無藤 (1990) によれば、多数存在する文脈の要因は独立に作用するのではなく、密接な関係を持つものである。それぞれの要因の機能が、相互的に作用することで、自己主張にどのように影響を及ぼすのか検討することは、本研究から、より前進した研究であり、今後の課題として非常に興味深い。

付記

本論文は2012年度北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科において、卒業論文として提出したものに加筆・修正したものである。

謝辞

本論文の作成にあたり、ご指導いただきました鴨澤あかね先生、卒業論文作成の際にご指導いただいた牧田浩一先生に、心より感謝申し上げます。また、調査・分析においてお力添えをいただきました諸先生方、調査協力者の皆様に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Brown, P. & Levinson, S. C. (1978). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press. ベネロビ・ブラウン, スティーヴン・C.レヴィンソン, 田中典子 (監訳) (2011). ポライトネス: 言語使用における、ある普遍現象 研究社
- 平木典子・沢崎達夫 (2002). アサーション・トレーニング講座—カウンセラーのためのアサーション 金子書房
- 石川有紀子・無藤 隆 (1990). 要求表現の文脈依存性. その規定因としての役割関係 教育心理学研究, 38, 9-16
- カノックワン・ラオハブナキット (1995). 日本語における「断り」—日本語教科書と実際の会話との比較— 日本語教育, 87, 25-39
- 三田村 仰・松見淳子 (2009). 自由記述によるアサーション規定要因の検討—言いたいことが言えない理由としての他者配慮— 不安障害研究, 1, 343-344
- 三田村 仰・松見淳子 (2010). アサーションの文脈依存性についての実験的検討—話し手と聞き手の観点から— 対人社会心理学研究, 10, 77-86
- 中山 治 (1988). 「ほかし」の心理—人見知り 親和型文化と日本人— 創元社
- 岡田朋之・松田美佐 (2012). ケータイ社会有斐

閣

- 岡本真一郎 (1986). 依頼の言語的スタイル実験
社会心理学研究, 26, 47-56
- Thomas, J. (1995). *Meaning in interaction: an introduction to pragmatics*. London: Addison-Wesley. トマス, J. 浅羽亮一 (監修) (1998). 語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味— 研究社
- 宇佐美まゆみ (2002). ポライトネス理論の展開 (1) 「ポライトネス」という概念 月刊言語, 31 (1), 100-105

